

In the plane/In the train

CMEO 事業部 田村一雄

2002年5月に取得したパスポートの残りページが少なくなったので、出入国のスタンプの数を数えてみたら280個くらいあった。280個だからといって140回飛行機に乗ったわけではない。香港から深圳に電車や車に入ったこともあったし。しかし、まあこの8年間で135回くらいは国際線の飛行機に搭乗したことにはなる。商社マンを始め、海外出張の回数で言えば上には上がいるだろうが、私も一般から比べれば少なくは無い方だと思うので、飛行機や海外出張関連でのエピソードや考えたことなどを書いてみようと思う。

現在のパスポートは2冊目で、1冊目は1997年の9月頃に台湾に初めて出張するために取得した5年ものの黒いパスポートだった。このパスポートは今どこにいったかわからないが、たぶん、スタンプは6個くらいしか押されないまま役割を終えたのではないか。

この初めての台湾出張は、台湾工業技術院でセミナーの講師をしてほしいとの要請があり、最初、私は「いやだ」と断ったのだが、当時入社して1年も経っていない船木知子という部下（8月号で「本を読むということ」というタイトルでメール対談した）が、「行った方がいいですよ」とか軽く言うので、「じゃあオマエも一緒に来なさい。講演の一部を担当しなさい。また、トイレと寝る時以外は片時も私から離れないこと」といったら酒席のこともあってか、船木知子も一緒に行くことになってしまったのである。そこで私、弊社中国室担当（中国から帰化：章さん）、弊社海外担当（台湾国籍・・・だと思ふ：フィービーさん）の3人で機上の人となった。船木知子はプライベートな旅行が入っていたので数日前に台湾入りしていた。当時のことはあまり覚えていないが、私はチェックインなど飛行機の搭乗手続きがまったくわからなかったし、日暮里からのスカイライナーも章さんと一緒に乗り込んで、飛行機の座席に着くまで章さんとべったりくっついていて、覚えていることといえば、当時は飛行機内で喫煙が許されていたこと。いい時代であった。

講演当日、すごい台風であった。台湾では台風休暇？というようなものがあるらしく、学校等は休み、交通機関はストップ、したがってお客さんは会場まで来られない。ということで講演は中止となった。夕方頃より台風は去り小雨になった。私と

章さんは台北の夜の町に繰り出し、屋台やいかがわしいお店をひやかしたりした。翌日は何も予定がなかったので（なぜ予定がなかったのだろう）昼頃から町に繰り出し故宮博物院や中正紀念堂をみた。故宮博物館では章さんが心なしかくやしそうにみえた。夜は高級ホテルで台湾料理を食べた。^{*1} 結局何もしないまま台湾グルメ観光ツアーで終わってしまった。

台湾・台風といえば2年ほど前、台湾メーカーへの取材で船木知子と訪台した。このときは、後で知ったのだが「NEWS」が初めての台北公演を行うということで日本からもギャル達が応援に駆けつけていた。我々が宿泊するホテルにも日本のギャルが大勢泊まっていた。どうも様子がおかしいので一人のギャルをつかまえて聞いてみたのである。私はそれまでNEWSがジャニーズであることを知らなかった。NEWSという固有名詞も知らなかった。コンサートの日は台風で中止、翌日2回の公演が行われたという。我々はこの日に帰りたかったのだが、飛行機のチケットがとれず次の日に帰ることになった。桃園空港ではこれまた日台のギャル。NEWSが帰国するのだ。と、私のすぐ前を若い少年達がすり抜けるように歩いていった。NEWSだ。ほんの10cm手前を歩いていこうとしたのである。私はすかさずケータイを取り出し写メを撮ろうとしたら、隣にいた船木知子に「はずかしいからやめてください」とたしなめられてしまった。あの時写メ撮っておけば、あとあとまで自慢できたのに。

この300回近いフライトのうち5回ほどビジネスクラスにアップグレードされたことがある。成田⇄台北（桃園）×2回と羽田⇒ソウル1回だったと思う。やはりビジネスクラスは快適だ。食事もよい。航空会社はエコノミークラスの客は客と思っていないといった話も耳にしたことがある。ビジネスクラスを経験すると「そうかもな」と思ってしまう。成田⇄台北の2回は、確か2週連続で訪台した。短い期間で2回もアップグレードしてもらったのでANAはいい会社だなあと思った。その後ANAに乗り続けたがアップグレードはこれが最後であった。2週連続だと行きも帰りも食事は全く一緒であった。今月（10月）はソウルに2週連続で行った。2回とも行きも帰りも同じ便で、やはり食事は全く一緒であった。客席乗務員に尋ねたところ、食事は2週間同じものが出続けるらしい。どうせ行くなら2週間空けて行きましょう。

飛行機や新幹線の中では靴を脱ぎたくなる。新幹線では靴を脱ぐだけだが、飛行機に乗るときはスリッパを用意している。スリッパはホテルに備え付けのものをもらってきたものだ。いつものように飛行機の座席についてスリッパに履き替えたら、通路をはさんだ隣のおじさんが座席のポケットを探りながら「おかしいなあ」という顔をしている。きっと自分にもスリッパがあるはずだと思ったのだろう。エコノミークラスにはスリッパはサービスしてくれないっつうの。

数年前には中国にもよく行った。上海、北京、深圳、広州、温州、香港などの空港を利用した。中国国内の飛行機ではミネラルウォーターとコッペパンが出されることがある。バターっ気のないコッペパンに水？という感じで私には食べられない。しかし現地の人は喜んで食べているようだ。しかし、目的地の空港に着いて飛行機を降りようとする座席や通路中 PET ボトル、コッペパンの袋、その他ゴミだらけだ。

上海から温州に飛んだときだったと思う。飛行機が水平飛行にうつった頃、リコーダーの音が聞こえ始めた。へたくソなアマリリスのメロディ。小学生くらいの女の子が練習か。なにも飛行機の中で笛の練習をすることもなかりうに。客席乗務員もまわりの大人も誰も注意してくれない。中国人のお行儀の悪さとは無神経というか寛大さというか、そうしたものの上に成り立っているようだ。

私が初めて飛行機に乗ったのは 30 歳になる少し前のことで遅いデビューであった。羽田⇄札幌の JAL 便。初めてなので窓側に席をとり下界の景色を見るのが楽しみであった。しかし、離陸と着陸の少しの間は景色を楽しむことができるが、あとは雲の上で青い空が続くばかり。こんなもんかと思い、その後はずっと通路側に席をとっている。通路側はトイレに立ちやすい、着陸後すみやかに飛行機から出やすい（ほんのわずかな距離と時間だが）といったメリットのほか、ここでは書きにくい楽しみもある。知っている人は知っているはずだ。

ちょっと話は変わるのだが、新幹線などを利用して長距離の出張に出るようになったのはヤノケイザイに入社してからだ。入社以前の仕事では山梨とか茨城に車で移動することが多かった。ある日、新幹線で小田原に行くことになった。東京駅に行くと新幹線が発車しようとしている。時間ギリギリで会社を出たのでヤバイと思い階段を駆け上った。ドアが閉まる寸前、車内に滑り込んだ。ぎりぎり間に合った。

席に着くと汗が出てきた。しばらくするとおなじみのメロディ（当時は「汽笛いっせい新橋を〜♪」だったか）に続いて車内放送、「〜ひかり●●号」。「えっ」。というわけで別の汗が出てきた。でも名古屋まで止まってくれない。車掌さんがきたらどうしよう。車掌さんがきた。ドキドキ。私は「小田原にいくつもりだったのに間違えて乗ってしまいました」と小さな声で言った。車掌さんはやさしく「わかりました、名古屋で降りて乗り換えてください」「料金はどうなるのですか」「この切符で大丈夫ですよ」たぶんこんな会話だったと思う。こうして名古屋まで行ってから小田原に戻り、小田原の取引先では大笑いされた。先の車掌さんとの会話のあと、こだまと間違えてひかりに乗ってしまったことを車内から会社に電話して伝えていたからだ。小田原の仕事を終えて会社に戻ると午後4時頃。会社でも大笑いされ、それから車で茨城方面の取引先に向かい、家に戻ったのは夜中の2時頃。東京⇒名古屋⇒小田原の約4時間のロスタイムがなければもっと早く帰宅できたのに。22歳の頃。

28歳の頃にヤノケイザイに入社して本格的な出張が始まった。当初は新幹線で行くことがうれしくてうれしくて、例えば大阪に着くと*2「にじむ街の灯を〜♪」、京都につくと*3「あの人の姿懐かしい〜♪」というメロディが消しても消しても心の中に浮かんできたりした。帰りの新幹線では必ずお酒を買って飲んだ。しばらくこんな出張が続いた。なお、海外出張が始まって飛行機に乗ったときも最初の頃は調子こいてかなり飲んだ。

今は一人で出張するときは新幹線でも飛行機でも飲まない。飛行機ではトマトジュースかゆず（JAL）およびかぼす（ANA）だ。酒を飲まなくなったわけは、新幹線だと東京駅から家に帰るのがめんどくさくなること、一度アルコールを取り込んだ私の体は一軒（車中を一軒目とカウントする）では済まないからだ。飛行機で飲まないのも同じ理由だが、それに帰りの便ではだいたい二日酔い状態という理由も加わる。

でもねえ、オジサンたちが3~4名のグループで出張しているのはうらやましい。仕事を終えて新幹線の中でイカとか食べながらビールや酒を飲んで、周りの迷惑顧みず大声でくっちゃべっているのをみると「いいなあ」と思う。グループに若い女の子なんかがいるとなお良い。オレもいつかこういうことをしたいなあ。船木知子さん、今度こういうのやろうね。

[筆者注]

- ※1 主催者側との打ち合わせにより、11月に講演は延期となり、同じメンバーで訪台、講演はと
りあえず無事に終わった。
- ※2 上田正樹「悲しい色やね」
- ※3 渚ゆう子「京都慕情」

執筆者略歴：田村一雄

1989年、(株)矢野経済研究所に入社。以来、化学・素材分野の調査研究に従事し、現在はデバイス領域まで調査領域を拡げ、CMEO事業部の事業部長としてエレクトロニクス分野の川上から川下領域を統括。知的クラスターへのコンサルティング実績を有するほか、台北事務所所長、ソウル支社長を兼務。